

医者も知らない平穩死



連載⑬

外していいけど、外せない。なぞなぞ「みたいですが、これがまさに胃ろうの現実です。」

胃ろうは、口から食べられなくなつた人に、人工的に水分や栄養分を注入するチューブを通すための「ろう孔」です。ただし、患者さんが口から食べられるようになったら、胃ろうからの栄養を減らすか中止して、再び口から食べてもらう。これが、実にシンプル

な考え方です。

でも、高齢で誤嚥性肺炎のリスクから胃ろうを造設した患者さんのご家族が、「本人が口から食べたいと言っていますし、胃ろうを外したいんですけど……」

訴訟が怖い



(写真はイメージ)

とところが、遠くの親戚が「なぜ延命措置をしなかった?」「医者の怠慢じゃないか?」「訴えるべきだ!」と医者を責め立てる。そのうち、「胃ろうを外したのは、本当に正しい行為だったのだから」とご家族も悩み始める――。

と担当医にお願いしても、なかなかOKは出ないでしょう。

また、「胃ろうを外して様子を見ましょう。誤嚥性肺炎を何回も起こすようなら、胃ろうを再度検討しましょう」といった答えが返ってくることもないと思います。ただひたすら「胃ろうを外すのはダメ!」と言われるのみ。そんな時、担当医が考えているのは、「トラブルは避けた

へ長尾和宏/長尾クリニック院長。日本尊厳死協会副理事長。著書に『平穩死』10の条件』など。

い」ということです。

胃ろうを外した後、患者さんがゆつくりと老衰し、自然に旅立られた。本人もご家族も、何度も話し合った末での希望通りのエンディングだった。

そんなトラブルは、決して珍しいことではありません。大切な人を亡くしたご家族の気持ちには常に揺れ動いているからです。結果的に、医師がご家族から訴えられてしまう可能性もあるのです。

医師として、そういう事態は極力避けたい。そもそも医師には、「死は敗北」という考えがあります。だからやっぱり外せない……。それが胃ろうなのです。